

立命館大学建設会

発行所

立命館大学建設会事務局

〒525-8577

滋賀県草津市野路東1-1-1

立命館大学理工学部

都市システム系事務室内

令和7年8月

第39号

会長挨拶

建設会会長

川嶋 淳一

昭和五十四年卒



立命館大学建設会の会員の皆様には、ますますご清祥にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、四月十三日、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、大阪・関西万博が開催されました。途中、海外パビリオンなどの建設が遅れ、延期や中止すべきとの話まで出ていましたが、最終的には、大半のパビリオンが無事開館しました。吉村大阪府知事が開会式のあいさつの中で関係者毎に七回「ありがとう」の言葉を繰

昨今の世相と建設会

都市システム系学系長

樋口

能士



二〇二五年度の学系長を務めております。環境都市工学科の樋口です。建設会の皆様におかれましては、平素より立命館・都市システム学系における教育・研究へのご支援、また建設会や校友会の諸活動へのご協力を賜り、学系教員を代表して、改めて感謝申し上げます。

私は一九九六年度より本学でお世話になっております。赴任当時はBKCが開学して間もない頃で、理工学部のみで広大なキャンパスを独占しており、今よりも随分と静かな雰囲気だったと記憶しています。以降、経済学部、経営学部のBKC移転に始まり、徐々に学部や学生が増え、講義棟や研究棟の増築も繰り

り返したことが話題となりました。知事は「開会式を迎える今日、感謝の気持ちを言葉にさせてください。」とした上で、「まずは、夏の暑い日も、冬の寒い日も現場で頑張ってください。工事関係者のみなさん、ありがとう。」と始められました。開会式と言うハレの場において、わざわざ最初に工事関係者に対しねぎらいの言葉をかけるというようなあいさつを、私は今まで聞いたことがありません。知事もきつと間に合うか不安に感じ

返され、もはや建物を建てる場所などどこにもないのでは？と思いきや、キャンパス正門近く、クインスタジアム横に新たに研究棟が建築され、今年度にも竣工・共用の運びとなっております。ここで新たに創設される「グラスルーツ・イノベーションセンター（仮称）」では、ヒトの周辺環境が心身に及ぼす影響を研究すること、ウェルビーイングに繋げる研究（「身体圏研究」と呼ぶそうです）が学際的に展開される予定です。私自身は、こうした学内での新たな動きからは全く蚊帳の外にありますが、自分の専門分野である大気汚染制御、悪臭対策で、また廃棄物処理や環境影響評価など環境工学

ておられたのではないのでしょうか。会場に来た際はいつも工事の様子を気にしておられたのでしょうか。昨今、建設現場においては、人の確保が難しく、また、残業時間の制約があり今までのようになかなか無理がきかなくなってきたというわけですが、そのような中においても現場ごとにいろいろ工夫を凝らし最後までやり切ったわけで、日本の建設業の心意気と底力を見ることができたのではないかと思っています。建設会の会員の中にも万博の工事に直接的、間接的に従事された方が多数おられると思います。本当にご苦勞様でした。心より敬意を表したいと思います。

また、今、大学では、宇宙を重要な研究領域のひとつととらえ、月・惑星・地球における人類の生存圏拡張や将来的な居住・生活圏を構築するために必要となるイ

に関連した分野で、人々のウェルビーイングに少しでも貢献したいと思いついて活動しております。また私は今年度、学系長兼学内幹事として、久しぶりに建設会で役職をいただきました。着任当初は学生担当として卒業パーティーの開催支援などをしておりましたが、その時代と比較すると、大学も一般社会もだいぶ様相が変わってきたように感じます。プライバシーに相当な注意が払われており、かなり以前から、各自の希望に応じて、建設会名簿への記載事項の一部を不掲載と選択できるようになっております。また、冊子で配布されていた名簿は、近年CD配布となっておりましたが、とうとう今年度より、名簿は一部の役職者・担当者の方に配布されることになりました。実際、建設会名簿の利用目的として真っ先に挙がるのが、年賀状の宛先検索であると思いますが、年賀状を送るという風習自体が昨今衰退して来ており、私も近年では「年賀状終い」のご挨拶をちよく

ンフラ技術の開発等を目的として、学内に「宇宙地球探査研究センター（ESEC）」を設置されています。新聞記事等で既にご存じかと思いますが、この度、そのセンタ―が、JAXAの「宇宙戦略基幹事業・SX研究開発拠点」に採択されました。他の大学や研究機関・企業と連携し、月面開発のためのインフラ整備に必要な地表・地下の探査・調査技術の開発やそれらの実証実験などにも取組まれるとのこと。地盤工学の技術を活用することで、人類の宇宙進出に役買おうと言うお話です。この話を聞いて、今の若い人はどう感じるのでしょうか？昨今、若い人の建設産業離れが著しく、これに対し業界では処遇改善や働き方改革に取り組んでいます。が、どうもそれだけでは十分ではないように、何か若い人達を引き付けるこ

ちよく受け取っております。私はこれまで毎年、家族写真を載せた年賀状で多くの方々にご挨拶しておりましたが、大半の方々とはSNSで緊密に連絡可能な状況にもなっており、昨年の郵便料金的大幅な値上げ、また息子たちの別居で夫婦二人生活となったことを機に、我が家もそろそろ潮時かなあ、などと思いを巡らせております。学内も当然のように環境が変化して来ており、学系教員も随分と若返りました（私からはそう見えて当然か）。二〇二四年度末には伊津野和行先生が定年退職され（現在は特任教授）、後任に井上和真先生が着任されました。一方で、私も若い頃には大変厳しくご指導を賜りました、村橋正武先生、山田淳先生が、今年の一月、二月に相次いでご逝去されました。両先生は、自らの学内外でのご活躍に加え、多くの素晴らしい卒業生を育てられました。現在学系所属の教員も皆、学内外で目覚ましいご活躍をされていて、その点で

とができるような新たな建設産業の魅力の創出が必要だと言われています。今回のような取組みが若い人達に夢や希望を与え、建設産業を見直してもらおうきっかけの一つになってくれることを大いに期待するところです。大学には、他にも様々な建設産業が抱える課題の解決に向け、先導的な役割を果たしていただいており大変心強く思っています。建設会の皆様もそれらの成果をもとにいろいろな場所、場面でご活躍されま

すことをご祈念いたします。最後にになりましたが、会員皆様の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、今後とも建設会の更なる発展のためご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。我々立命館・都市システム学系、そして建設会会員の皆様は、繋がりの形こそ変わって来てはいるものの、本学の伝統と母校愛をしっかりと受け継いでおられます。とりわけ、立命館大学技術士会では多くの建設会会員が活躍されており、技術士試験受験支援、本学でのキャリア教育に関する数々のご講演、さらには個別の授業支援、授業担当など、様々な形でご支援を賜っております。心より御礼申し上げますとともに、引き続きご支援の程何卒宜しくお願い致します。最後になりましたが、会員の皆様の益々のご多幸、ご健勝をお祈り致します。建設会総会や支部総会などの機会に皆様とお会いできることを、楽しみに致しております。

員

声

の

会

土木に携わった半生



京都市建設会
夢田幸生
昭和五十八年卒

一九八三年三月理工学部土木工学科卒業の夢田と申します。学生時代は金閣寺道の近くで友人と共に下宿して衣笠キャンパスの六号館に四年間通いました。学業に懸命に取り組んだとは言えず試験前には多数の友人と何処かの下宿に身を寄せ合い試験対策をしていたことや麻雀屋、居酒屋に通い合コンなどの調整に励んだ楽しい思い出ばかりです。卒業研究は「材料」に所属して明石先生、高木先生、角田先生にお会い出来て学業も楽しくなり「超音波を利用したフレッシコンクリート強度経過特性」の研究を徹夜作業で友人と共に語りながら過ごした事が今でも思い出されます。そんな学生時代の友人と同窓会をする機会が毎年のようにあり、その思い出話で懇親を深めています。卒業後、京都市内にあるコンクリート二次製品メーカーに就職して四十三年目となります。その間、プレキャスト製品販売に携わることはなく官庁工事を行う部署一筋にやって来ました。入社当時は造成、河川、上下水道等のインフラ、道路工事、施工管理を経験しました。入社六年後の一九八九年から二〇〇五年までの十六年間は、主に現場所長として日本道路公団発注の道路建設工事に携わりました。その間は、日本社会が「欧米に追い付き追い越せ」の風潮があり「二十四時間働けますか？」の言葉が流行りました。私自身も企業の異常さに乗せられてそこに挑戦させられていました。辛いことも多くあり何度も仕事辞めたいと思いましたが、

が、工事が完成した達成感と「折角土木技術者になったのだから」という気持ちで何度も踏み止まりました。一九九五年に発生した阪神淡路大震災時には、京奈和自動車道で拡幅工事しており、竣工前のタミングで施工から急遽呼び出しがあり、名神尼崎インター付近の震災地へ出向きました。いきなり突貫工事となり不眠不休で勤めました。私の実家は尼崎インターから五キロ位の所にあり両親が二人で住んでいました。実家は被災で半壊していましたが、発生直後に一瞬安否確認を取る事が出来ましたが、それ以降は電話連絡も取れず、車移動も渋滞で動けませんでした。私が帰ったのは地震後十日を過ぎてからでした。両親に会った時に「家がこんな状況なのに連絡もせず何処行つてたんや」と云々言われましたが、大した返答も出来ず「怪我がなくて良かったね。すぐに自分の現場へ戻るわ」と答えて帰ったことを今でも思い出します。その時もこの仕事辞めようと思いましたが、二〇〇六年から二〇一五年までは、京都本社に戻り各現場の所長を管理する立場となり、二〇一六年から現在まで営業職を兼ねて勤めています。営業職になってからは、役所やゼネコン等に立命館出身者や建設会の方も多く、関西で営業するにあたっては、相談や情報収集等で随分と助かったこともあり、立命館卒業生であることに随分感謝しました。これからは物造りの喜びや経験等を次の世代に伝えていきたいと考えています。

京都建設会では、事務局をさせて頂いています。今まで建設会が「心の支え」であったこともあり、少しでも役立てたらと思っています。建設会に出席するとエネルギーシユな先輩とお会いし、皆様と校歌を歌うことが自身の活力に繋がりました。これからも建設会や同窓会で楽しい時間を過ごせたらと思っています。今後の建設会皆様の益々のご健勝・ご活躍を祈念しております。

健康問題について



広島県支部代表幹事
福馬啓人
昭和六十一年卒

広島県支部は、久しく総会も開

催できておらず、代表幹事として誠に申し訳ない限りです。まずは一言、お詫びを申し上げます。さて健康について。実は先週、三週間の入院から退院し、現在自宅療養中の身です。コロナに感染（全く感染経路に思い当たる節はありません）し、三十九℃程度の発熱となり、医師からは薬の処方と共に「あと数日で熱は収まるでしょう。今日から五日程度は人への接触に注意してください」との話がありました。

実際、一旦熱は収まり、通常の生活にシフトしました。ところが二日ほどすると、高熱ではないにしても、発熱が続くようになりました。コロナの際に処方された解熱剤がいくらか余っていたので、それで数日をしのいだのが悪かったです。結果は肺炎で入院になりました。初期は四十℃超の熱が一日三回、発熱・解熱を繰り返す状態が二日超続き、意識は朦朧・：なかなか悲惨な状況になりました。

これに対して何か良い提案は思いつきませんが、一か月近い発熱生活の中で、結果的にアルコールの接種を断っていました。私は高血圧で服薬治療をしていたのですが（平均的に服薬後の最高血圧一四〇mmHg程度）、入院時は大体一〇〇mmHg程度以下、低い時は八〇mmHg程度という結果でした。アルコールが全てではないので、しょうが、ちょうどその頃、NHKの「クローズアップ現代」で「成人病とノンアルコール飲料」といったテーマで放送されていたのを見て、色々感ぜさせられました。ノンアルコール飲料の味覚等の向上も相まって、成人病治療に大きな効果が得られている（アルコールの摂取量を大幅に減らせる）というのです。実際に自分でやってみると、その効果を実感できる部分が多く、これからも継続してみようと思っています（アルコールを断つのではなく、減らす）。皆さんも、ノンアルコールにチャレンジしてみませんか？

いま思うこと



岐阜県建設会
正 大助
平成元年卒

大学を卒業して三十六年が経ち、今思うと在学中で一番印象に



令和6年度 立命館大学岐阜県建設会 総会

残っているのは、時代が昭和から平成に変わったことです。昭和最後の日（昭和六十四年一月七日）は朝一番からアルバイトがあり、京都市内をスクーターで走っていると、建物の入口に巾着が掲げられているところが多数あり、昭和天皇が崩御されたとすぐにわかりました。その日テレビでは一日中このチャンネルを回しても同じ番組（敗戦後の日本）を放送していました。その日は私の誕生日であったため、今でも記憶が残っています。その翌日から元号が平成になり、それから、三十六年が経ち今は令和の時代になりました。時間の流れは早いと感じています。就職してからは、東海地方を中心に建設現場を回っています。校友会は当初、愛知県衣笠会に途中から現在の岐阜県建設会に参加させていたのですが、まあと、参加と言った名前だけでなかなか行事に参加できずこの「建設会会報」の寄稿依頼がきたのもビックリです。今は岐阜県の中津川市の地の元の会社に在籍しています。この周辺はリニア特需ではありませんが、駅と基地ができることもあつて五年程前から山のように仕事があり、地元業者ではとてもまかな

えない状態で、あと五、六年はこれが続くそうです。私の背中には「多忙」の二文字が常につきまといっています。その中でも家庭を大事にしている私は、今年の四月に有給をとって家族で韓国旅行に行っていました。観光で行ったつもりが職業病でどうしても工事現場に目がいってしまいます。韓国の大通りを歩いていると、歩道の整備工事に出くわしました。が、現場を見るなり「マジで？」と思うほど安全意識の低さかなり残念な気がしました。二十五年前にシンガポールを旅行したときも同じような風景を見ましたがその時は、「東南アジアってそんなもんかな」と軽く流していたのに韓国は衝撃的すぎて驚きしかありませんでした。そのあと、旅行から帰ってきて、家族と旅行の感想戦をしたときに日本との違いを熱弁していたそうです。仕事はと言うとコロナ禍を契機に、会議はWEBで、飲み会はなし、最近では働き方改革で、ノイ残業デーや完全週休二日と就職した頃を思えば「何とステキな時代の到来」と思いましたが、現場は相変わらず天候に左右され思うようには進んでいかないので現状です。冬は長い寒波、春と秋は短く、夏は猛暑とまさしく自然との戦いになっていきます。その中でも、三十年代土木屋をやっていると物の見方も変わってきます。最初は「設計図通り作ればOK」から、完成した後のことを考え仕事を進めています。と言うのも岐阜県には社会基盤エキスパート（ME）という技術者制度があります。これは、インフラ整備や災害リスク管理、地域の活性化等の地域社会発展や維持管理をつかさどる制度です。平成二十四年五月の一か月間、岐阜大学に通い養成講座を受講して資格を取得しました。学生時代は講義の出席率も悪く何とか卒業した私にとっては非常に苦痛の日々でしたが、この資格取得後にはものの見方が変わり作って終わりではなく、その後の維持管理に着目して仕事を進めていくようになりました。所属会社では建築（特に住宅）・土木の両方ができるのが基本で、両面からの今までの工事の経験とこれからの維持管理を考えると、今やっていること、これからやる事が非常に楽しみです。この先、還暦を迎えあと何年働けるかはわかりませんが（やる気次第かな？）今までの経験でなくなることが、これからの数年に出会

卒業から三十四年を振り返って



立建会会長
小山卓爾郎
平成二年卒

私は、平成四年に大学院を修了した立建会会長の小山です。大学四回生だった平成元年四月、新設された春名政教授の都市計画研究室で三年間を過ごしました。研究室は新設されたばかりで、当時は先生の顔もわからず、京都大学近くの喫茶店で先生と研究生六名が初めて顔を合わせたことからスタートしました。春名先生は大手ゼネコンと連携した仕事をされていたため、研究費が潤沢で、研究室の環境整備に力を入れていました。部屋の模様替え、電話の開設、そして学生一人に一台のパソコンという企業並みの環境は、他の研究室が見学に来るほどでした。新設の研究室には先輩の大学院生がいなかったため、京都大学での研究を継続すべく、京都大学の院生の方々に指導いただきました。立命館大学から京都大学まで、京都の端から端まで何度も往復した日々は、今となっては懐かしい思い出です。研究活動においても、市役所や企業との連携が多く、学内での研究にとどまらず、学外での打ち合わせやアンケート調査など、多岐にわたる作業を実施しました。卒業後、私は大阪府に入庁し、主に道路部門で三十四年間、道路の整備や維持管理に関する業務に従事し、大阪府の道路行政の推進に尽力してきました。入庁した平成四年は、関西国際空港の開港を二年後に控え、職場は非常に活気に満ち溢れていました。私は道路の新設事業の副担当として、公務員生活の第一歩を踏み出しました。公務員として二年が経ち、橋梁の維持管理部署に異動した矢先の平成七年一月、阪神淡路大震災が発生しました。職場へ向かう途中、ラジオで阪神高速神戸線が倒壊したと聞いた時には、状況が全く飲み込めなかったことを覚えています。

職場に到着し、テレビで映し出された映像を見た時、橋梁担当でありながら、このような壊れ方をすることと大きなショックを受けました。担当する管内にも同型式の橋梁があったため、当時の上司と共にすぐに点検に走り回りました。

その後、本庁勤務となり、現場とは全く異なる業務に携わることになりました。建設省との協議、調整、予算獲得が主な仕事となり、徹夜で資料を作成し、朝一番の新幹線で片道三時間以上かけて上京する日々を送りました。当時はサラリーマン向けの「二十四時間 聞えますか」という飲料CMが流行しており、現在では考えられないような社会情勢でしたが、私にとっては非常に充実した日々でした。

平成二十八年から現在までの約十年間、新名神高速道路や阪神高速大和川線などの高速道路関連の道路整備を担当し、数々の供用を経験してきました。「ものづくり土木屋」冥利に尽きる仕事に従事でき、事業の最終ランナーとしての苦労は多かったものの、大きな充実感がありました。

現在の茨木土木事務所長を最後に府庁を退職する年に、大阪府の幹線道路の一つである「都市計画道路十三高槻線」の開通式典を本年六月に実施できたことは、万感の思いです。

大規模事業に携わる中で、私は「約束を守ること」と「チームワークの重要性」を改めて認識しました。完成した道路に車が走行しているのを見た時、自身の仕事のやりがいと誇りを実感し、協力をいただいた地元関係者の方々への感謝の気持ちで溢れました。若い職員には、「夢を持って、やりがいを感じ、社会の役に立つ」仕事をしてほしいと常々話しています。

最後になりますが、立命館大学建設会の益々のご繁栄と、皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。結びとさせていただきます。

極寒地からの近況報告



北海道支部

井上真澄

平成十年卒

私は、平成六年四月に理工学部土木工学科に入学した、びわこくさつキャンパス(BKC)の一期生です。児島孝之先生と高木宣章

先生のご指導のもと、平成十年に学部を卒業し、平成十二年に修士課程、平成十五年に博士課程を修了して博士の学位を取得しました。その後は母校にてポスドク研究員として、学内の研究機構によるプロジェクトに携わりました。また、平成十九年からの三年間は、建築都市デザイン学科においてコンクリート工学分野の助教として、教育・研究に携わりました。

平成二十二年からは、北海道の道東・オホーツク管内に位置する北見工業大学に赴任し、今年で十六年目を迎えます。岐阜県出身の私にとって北海道は縁もゆかりもなく、不安を胸に家族とともに新たな生活を始めた日が、ついこの間のように思い出されます。

大学のある北見市は、オホーツク海側の内陸に位置し、真冬の最低気温がマイナス二十℃を下回ることも珍しくありません。ただ、建物の断熱性・気密性が高く、暖房設備も充実しているため、冬場の生活は思いのほか快適です。一方で、最近では気候変動の影響か、夏場の暑さが本州並みに感じられる日が増えてきました。三十℃を超える日も年々増加しており、それに耐えかねて、昨年ようやく研究室にエアコンを設置しました。とはいえ湿度は低く、夜には気温が下がるため、暑さが苦手な私にとってはむしろ過ごしやすい土地と感じています。

こうした厳しい自然環境下にある地域特性を踏まえ、「寒冷地環境におけるコンクリートの施工性・耐久性の向上」を研究の柱としています。現在は、氷点下におけるコンクリートの凍結を給熱養生だけ頼らず材料面から抑制する技術や、産業副産物由来の混和材料を活用した環境配慮型コンクリートの開発に取り組んでいます。実験室での基礎研究はもちろんのこと、実際の施工を想定した実証研究にも注力し、寒冷地インフラの高度化と地域への貢献を目指した実践的研究を推進しています。

また、十年ほど前から、環境都市工学科・川崎佑磨先生の研究室と学生を交えた研究交流が続いており、隔年で双方の研究室を訪問し合い、研究発表や現場視察などを含む交流会を開催しています。同じ土木を学び、コンクリートを研究する学生同士が、地域を越えて交流できることは、相互に大きな刺激となる貴重な経験であり、将来にわたる財産となるネッ

トワークづくりの場にもなっています。今後、寒冷地という厳しい環境で得られる知見をもとに、地域に根差した実践的研究と人材育成を通じて、インフラの発展に貢献してまいりたいと考えております。これまでの研究活動の基盤となった立命館大学での学びと出会いには、今も深く感謝しております。建設会のさらなるご発展を願うとともに、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

立命館への第一歩



愛知県建設会

池津 亮

平成十一年卒

こんにちは。愛知県建設会の事務局をやっております。池津と申します。一九九九年に立命館大学の理工学部環境システム工学科を卒業しました。まさか自分が四半世紀以上前の話をこんな真面目な場所ですることになるとは、夢にも思ってませんでした。

さて今回、「立命館との関わり」をいろいろ思い出してみたいんですが、まあ出てくる出てくる。思い出という名の古びたビデオテープが脳内でガシャガシャ回り始めたんです。今頃はそんな中でも「受験」の話に絞ってお送りします。理由は簡単。再び原稿を頼まれた時にネタがなくなってしまうって困るからです。

私は名古屋出身で、最初は当然のように地元大学を受けるつもりでした。家から通えて、親しい友人もいて、コメダもたくさんある、そんなぬるま湯プランを練っていたわけです。ところが、ある日、両親からまさかのささやき。

「立命だったなら、一人暮らしOKにしたらよー」

「え？今なんて言った？立命？関西？一人暮らし？」

その瞬間、私の中の「関西への憧れ」と「親の許可」が奇跡のシンクロ。条件反射で「行く行く、めっちゃ行くー」と心の中で叫び、急遽「立命一本勝負」という流れに。

当時、たまたま通っていた塾で立命館の地方試験が受けられることを知り、「いつもの教室で受験できるなんてラッキーだー」と完全に調子に乗る十七歳。そして、試験科目は英語・数学・物理の三教

科。英語はさておき（お察しください）、数学と物理は当時かなり得意だったので、「これはイケるかも」と、根拠のない自信が炸裂。そして試験当日。なんと、前日に受けた某大学の試験で出た「謎に難しかった物理の問題」と似た問題が出題。前日にムキになって復習していたおかげで、本番では完璧に解けました。これには自分でも「これ、運命だてー？」と小声でつぶやいたほど。完全にラッキーパンチが決まり、無事に合格。で、つぎ「京都で大学ライフ！」なんて浮かれていたら、いざしつかり調べてみると「びわこくさつキャンパス」って…、え…どこ？それ？

ネットも今みたいに発達してないし、地図もあやふや。南草津駅に降り立った瞬間の印象は一言、「え…ここに人住んでるの…？」でした。駅前は静か、というかほぼ無音。駅タリにあるのは風の音と不安だけ。

そんな中、希望の光となったのが下宿先の「エクセルシオール滋賀」。実際、施設が豪華でした。レストラン、プール、サウナ、スポーツジム、日焼けマシンまで完備。もはや大学生が住む場所というより、バブルの残り香を凝縮したテーマパーク。草津にこんな世界があったとは…。

こうして始まった学生生活。最初の不安はどこへやら、友達もでき、関西ノリにも徐々に染まり、気づけば立命館を存分に楽しんでいた。そして、あの大学時代があったからこそ、今の自分があ

る。本当にそう思います。こんな軽めの文章で失礼いたしますが、立命館でつながった皆さんと、まだどこかでお会いして笑い合えたらうれしいです。次回、もし原稿依頼があったら「在学編」ですね。（たぶん断ります）。

新たな挑戦



関東建設会

井上雄司

平成十七年卒

RC構造研究室でコンクリートの実験に没頭し、四回生のときは研究室と実験室で多くの時間を過ごしました。コンクリートへの興味を深めた、学生時代に学んだことを生かしたいと考え、メーカーへ



着任の挨拶



環境都市工学科 助教

井上和真

このたび、二〇二五年四月より立命館大学理工学部環境都市工学科に着任いたしました。井上和真（いのうえ かずま）と申します。このようなご挨拶の機会をいただき、誠にありがとうございます。

私の専門は地震・耐震工学であり、これまで、構造物や地盤の耐震設計手法の高度化、また国内外の地震被害調査を通じた被害分析や将来の防災・減災に関する研究に取り組んでまいりました。近年は、IoTセンシングや三次元モデルを活用した橋梁などの損傷検知・維持管理に関する研究にも注力しています。

私は群馬県出身で、二〇〇七年に群馬工業高等専門学校（群馬高専）を卒業後、二〇〇九年に京都大学工学部、二〇一一年に京都大学大学院工学研究科を修了いたしました。中学三年生のときに、群馬高専環境都市工学科への進学を志しました。当時の志望理由は少々恥ずかしくてここでは控えさせていただきますが、まさか将来、土木を専門とする職に就くとは思っていませんでした。

大学院修了後の二〇一一年四月より七年間、大成建設株式会社勤務いたしました。橋梁部門では国内内外の橋梁の設計や施工支援、原子力部門では原子力施設の耐震安全性評価や研究開発を担当し、発電会社への出向も経験しました。また、在職中に京都大学大学院工学研究科博士後期課程へ進学し、仕事の合間に社会人ドクターとして研究にも取り組んでおりました。当時はまだ「働き方改革」も浸透しておらず、多忙を極めた日々でしたが、振り返ると大きく成長できた貴重な経験だったと感じております。

二〇一八年四月からは、母校である群馬高専に七年間勤務いたしました。教育・研究活動に加えて、野球部の顧問も担当し、平日は授業・研究、休日は部活動指導と慌ただしくも充実した毎日を送っておりました。二〇一九年九月には、京都大学防災研究所の五十嵐

晃先生のご指導のもと、「水平2 方向地震動に基づく構造物の耐震性能評価に関する研究」により、博士（工学）の学位を取得することができました。

今後は、これまでの実務経験や研究活動を活かし、立命館大学における教育・研究に全力で取り組んでまいります。特に、民間企業での実務経験をもとに、学生の皆さんが社会で即戦力として活躍できるように、基礎理論と実践的応用力のバランスを重視した指導を心がけたいと考えております。

研究面では、インフラレジリエンス研究室の運営を担当し、これまでの知見を活かして、インフラ老朽化や災害リスクといった複雑な課題に対し、実践的かつ学際的なアプローチで取り組んでいく所存です。また、地域社会、自治体、企業との連携も積極的に進め、実用性の高い研究を展開してまいります。

最後になりますが、多くの方々と交流・協働を通じて、教育・研究の両面から環境都市工学分野の発展に貢献していきたいと考えております。今後とも、どうぞご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

着任から一年を振り返って



環境都市工学科
准教授
重富陽介

はじめまして、重富陽介と申します。二〇一六年三月に京都大学大学院エネルギー科学研究科にて博士後期課程を修了後（指導教員・東野達名誉教授）、同年四月から長崎大学環境科学部の教員（二〇一六年四月～二〇一八年十月…助教、二〇一八年十一月～二〇二四年三月…准教授）として八年間研究・教育に従事してきました。そして、このたび御縁をいただき、二〇二四年四月から環境都市工学科の准教授として着任しました。実家は京都市内にあるので、関西の空気はやはり落ち着きます（長崎の最高級の魚介とちゃんぽんは未だに恋しくなりますが）。元々の出身研究室は大気環境系のラボでしたが、私自身は大学院から学んできたライフサイクル工学（または産業エコロジー、お隣の

橋本征二先生は同分野の大先輩です）を専門としています。具体的には、最終財として消費されるモノやサービスを、そのサプライチェーンを経由して逐次的に発生させている環境負荷（フットプリント）と呼ばれるものを定量化し、俯瞰的に環境問題を捉えて解決を図ることを狙いとするシステム研究分野です。その中で、私は深刻化する少子高齢化とカーボンニュートラルの両面に着目し、人健康と地球環境保全の両立を目指す「ブラネットリーヘルス」の実現に寄与する研究に力を入れていきます（余談ですが、この原稿を書いている翌週にこれに関連する大阪万博のイベントで登壇します）。

前置きが長くなりました。立命館大学に来て一年少し経ち、その間立ち上がった自身の研究室についてご紹介したいと思えます。着任直前、新しい研究室の屋号を決めさせていただけることになり、あれこれ悩んだ末に「サステナブルライフスタイル研究室」と名付けました。ただ、長くて噛みそうになるので、省略して「サスライラボ」と呼んでいます。これが案外、人にも覚えてもらいやすいようです。研究の学生たちはその名前に因み、独自の目線とフットプリントの考え方を軸にしながら、持続可能な社会におけるライフスタイルの実現に向けた知見を見出そうとする研究を行っています。例えば交通や観光、医療といった特定の需要が誘発する環境負荷について解析する学生たちもいれば、建築や防災等のライフスタイルを支える社会インフラ整備に要する資源消費に対する解析を行う学生たちもいます。初年度と二年目に前任校からも三名の学生が大学院生として入学してくれたこともあり、現在は博士生二名、修士生三名、学部生九名、技能補佐員一名で、ワイワイと「さすらい」ながら研究室を運営できています。本学の研究・教育環境は素晴らしく、周囲の先生方は優秀で人間的にも温かい方々ばかりで、多忙の中でも充実した教員生活を送れています。また、事務室の手厚いサポートには常に助けていただいております。この場を借りて深く感謝申し上げます。建設部会の皆さまにおきまして、サスライラボと申します。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

立命館大学技術士会の活動内容の紹介とお願い

立命館大学技術士会は、平成21（2009）年12月に立命館大学出身者で技術士資格を保有する校友により設立され、その活動は16年目を迎え、会員数は約170名となっています。

【活動内容の紹介】

①立命館大学理工学部卒業生への技術士受験指導を実施。結果、建設部門、上下水道部門、機械部門、総合技術監理部門に、延べ46名の技術士を輩出。
また、技術士資格挑戦者への支援として、毎年3月より受験ガイダンスおよび受験講習会を各2回実施。さらに、11月以降で口頭模擬試験を数回実施。

②本学の教育活動に協力し、学園の発展に貢献。
環境都市工学科の授業担当講師として、技術士制度および技術士資格を取得するための過程について講義し、将来受験する技術士第二次試験について、実際に例題を取り上げて解説。

また、環境都市工学科の授業を活用し、1回生には『めざせ！技術士』、同3回生には『立命技術士懇談会』と題してJABEE制度や技術士の職務と役割について講義し、学生達に受験意欲の向上を図ると共に、卒業後の技術者としての社会活動のあり方や実社会での経験談を披露。

③地域及び社会活動への技術的支援や未来の技術者への助言を発信。
その一環として、平成27年7月に『土木、この素敵な世界』～技術者がつなぐ未来のネットワーク～、令和4年1月に『土木技術者が語る未来』～今、伝えておきたい技術者の心～、と題して電子書籍を発刊。立命館大学卒業生の土木技術者達の力作です。

【技術士会からのお願い】

★当技術士会の活動にご協力いただくためにも技術士資格取得者の方々には、当会に技術士資格の保有情報を下記事務局までお知らせください。

★平成29年から会員相互の交流の一環として会報誌をリニューアルし、会員相互のコミュニケーションツールとして、また会員技術士の論文発表の場として活用しています。

★当技術士会の目的に賛同いただき入会をご希望の方は、ご連絡をお待ちしております。みなさんと一緒に、技術者の地位向上と社会への貢献に微力ながら前進させたいと願っております。

令和7（2025）年5月 立命館大学技術士会幹事会
事務局連絡先：企画・窓口担当 E-Mail：rits.kikaku.mado@gmail.com
立命館大学技術士会ホームページ：https://alumni.ritsumeijp/gijutsusikai/

建設会総会・特別講演会・懇親会開催

第23回建設会総会・特別講演会・懇親会を下記の要領にて開催いたします。

ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが、万事お繰り合わせの上、多数ご参加を戴きますようお願い申し上げます。

記

【日 時】2025 年 10 月 26 日（日） 14 時～19 時

【場 所】都ホテル京都八条
〔京都市南区西九条院町 17 京都駅八条口〕

【会 費】10,000 円

【次 第】14：00 ～総会
15：20 ～特別講演会
16：40 ～懇親会

- 参加申し込みは前納とさせていただきます(9月26日締切り)。
- 同封の総会専用払込票にて、郵便局よりお振り込み下さい。

※詳細につきましては、[こちら](#)のお知らせをご参照下さい

事務局より

お知らせ

■会員登録データ

建設会会員名簿のもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」をご確認いただき、修正や変更等がございましたら 8月末までに建設会事務局までご連絡下さい。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。

2025年度会費のご納入をお願い致します（年会費：3,000円）。

なお、銀行からのお振込も可能です（ゆうちょ銀行109（イチゼロキュウ）支店、当座0000884）。お振込の際、お手数ですがお名前の前に10桁の会員コードを

▶過去名簿のお取扱いについて

名簿は、会員の皆様の大切な個人情報に掲載しております。過去の名簿をお持ちの会員様は、その保管およびお取扱いには十分ご注意くださいようお願い致します（転売厳禁）。ご不要になった名簿につきましては、お手数ですが焼却あるいはシュレッダー処分をしていただけますようお願い致します。

建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1
立命館大学理工学部都市システム系事務室内（担当：山元）
TEL：077-561-4911 FAX：077-561-2667

https://ritsumeij-kensetsukai.net/
E-mail：kenstkai@st.ritsumeij.ac.jp
会費払込郵便振替口座：02 大阪 01080 - 1 - 884

※8月8日～18日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。